国語科におけるリテラシーの授業　続続
ー中学３年生の古典の授業からー

金子　直樹

2006 年度から当校では「新サイエンスプログラム」と題して，「リテラシー」をキーワードとする全校あげての研究開発を行なっている。国語科では従前から，教科の指導内容そのものが「リテラシー」育成を目指すものであるが，この機会に改めて「リテラシー」という考え方を軸にして授業を構成してみた。題材として取り上げる「古典」は，扱い方によっては内容主義や尚古趣味に陥りがちなものであるだけに，むしろ「リテラシー」の本質である「批評」や「相対化」という面を強く意識しておかなければならない。本稿は，古典を読むにあたって，調べ活動や生徒相互の読みの検討という活動を通して，自身の読みを相対化し，読みを作り出してゆく過程を意識するということをめざした授業報告である。

なお本稿は，本紀要における一昨年，昨年からの報告「国語科におけるリテラシーの授業－中学生の古典の授業から－」の続編である。

１．単元　「夢」説話を読む

この授業報告は，2008 年度中学３年生での「選択国語」によるものである。「選択」授業は週１時間の実施で，社会・理科・技術・保健体育との５教科の中からの選択であり，本年度は学年 122 名中の 24 名が選択受講をした。「国語」を選択すること自体が，興味関心の高さを保証するものであり，また，普段の 40 人での授業に比べると少人数で全体に目が届きやすく，活動も仕組みやすいという特徴があった。

本単元「『夢』説話を読む」は，1 学期の 13 時間をかけて実施した。時間数が多いのは，「国語」の通常の授業形態である教材（テキスト）の読解そのものだけでなく，調査の活動や，他の生徒との意見交換・読み合わせの活動を通して，読みの可能性を広げてゆくことをめざしたためである。

単元展開は，次の通りである。

①テキストの読みと，初発の感想発表（３時間）
②人物調査レポート作成と，中間まとめ発表（６時間）
③まとめレポート作成と，相互評価（４時間）

２．テキストと，初発の感想

教材は，①「伴大納言のこと」（『宇治拾遺物語』巻一第四），②「藤原師輔のこと」（『大鏡』師輔伝），③「吉備真備のこと」（『宇治拾遺物語』巻十三第五「夢買ふ人のこと」）の三編を用いた。

①「伴大納言のこと」は，佐渡国の郡司の従者であった伴善男が，「西大寺と東大寺とをまたげて立ちたり。」と見た夢を，妻に「そこの股こそ，裂かれむずらめ。」と合わされてしまった。郡司には「なんぢ，やむごとなき高相の夢見てけり。それに，よしなき人に語りてけり。かならず大位には至るとも，事出で来て，罪をかぶらむぞ。」と言われ，その言葉通りに，大納言の地位にまで出世したものの，罪を被ることになってしまった，という説話。

②「藤原師輔のこと」は，若き日の師輔が，「朱雀院の前に，左右の足を西東の大宮にさしやりて，北向きにて内裏をいだきて立てりとなむ見えつる。」と見た夢を，生女房に「いかに御また痛くおはしましつらむ。」と合わされてしまったために，摂政・関白に就けず，子孫にも（伊周の件など）不幸が起こったとして，「荒涼して心知らざらむ人の前に夢語りな，この聞かせ給ふ人々，しおはしまされそ。」という語り手の言葉で結ぶエピソード。

③「吉備真備のこと」は，備中国の郡司の子であった吉備真備が，国司の子が見た夢で，夢解き女に「よにいみじき御夢なり。必ず大臣までなり上がり給ふべきなり。返す返すめでたく御覧じて候ふ。あなかしこあなかしこ，人に語り給ふな」と言われた夢を，その夢解き女に持ちかけて買い取り，「次第になし上げ給ひて，大臣までになされにけり。」として，「されば，夢取ることはまことにかしこきことなり。かの夢取られたりし備中の守の子は，司もなき者にてやみにけり。夢を取られざらましかば，大臣までもなりなまし。されば，夢を人に聞かすまじきなり，と言ひ伝へたり。」という語り手の言葉で結ぶ説話。

この三編は，それぞれ固有のテーマを持つ説話・エピソードではあるが，授業では「夢語り」「夢解き」という共通項を設定することで，人間の人生をどのように描

こうとしているのかという語り手の意図を読み取ることをめざした。

①②はいずれも400字弱，③は800字強の本文分量であるが，中学生であることを考慮して，原文に全文口語訳付きプリントを用意した。授業の実際としては，教師の範読を聞いた後，ひたすら原文の音読を繰り返すという「読み」を行った。口語訳も参照できるので，古語単語や文法事項の説明は行わなくても，場面や人物関係を明らかにしながら音読を繰り返すうちに，生徒の発声のリズムやトーンから，物語内容を把握したことが分かるようになる。このような「読み」と，簡単な初発の感想書きに2時間，さらに生徒全員分の初発の感想をプリントにまとめて，それを読むのに1時間を用いた。

以下に生徒の初発感想をいくつか紹介する。(原文のまま。ただし，傍線は金子による。)

初発感想1 (A組KS)

この『宇治拾遺物語』の話の中での夢は，自分の未来の占いのようなものかな，と思った。また，将来高貴な身分になれるだろう，という夢も，ものの道理を知らない人に語れば，全て駄目になってしまうようなもの，と思われていたんだ，と思う。夢は，自分の運命を教えてくれ，他人に語れば良い夢でも悪くなるなんて，変な話だと思った。

初発感想2 (A組IS)

昔の人々にとって「夢」とは自分の将来を占う貴重なものだったと思います。今の私たちは「たかが夢くらい…」と思ってしまいますが，この三つの話に出てくる人々は，ものすごく大切に扱っています。夢合わせを間違えると出世できない，夢を取る，など，少し現代から見ると分かりにくいこともありますが，基本的に，この「夢」は現代の「占い」と同じようなものだと思います。すべてがその通りになるとは考えられませんが，信じることによってその通りになることもあります。「出世」のほかにも夢で占えることがあるのか調べてみたいです。

初発感想3 (A組MM)

昔の人は夢にこだわるのだなと思いました。寝ている間に見る夢は，いつも変わっていてあまり気にしないものだけど，昔の，自分の位を上げたい人などは「正夢」として考えていました。今でも確かに夢占いなどがあるし，夢とは信じられるものであるのかもしれません。三つの話で共通しているところは何個かあります。自分の見た夢を人に話していること，高い位につこうとしている人が夢を話していること。二つの話はものの道理を知らない人に話してしまって，夢が悪い方向へ外れてしまっています。最後の話は，いい夢を人から取って，自分の夢にして大臣にまでなっています。どちらも，人生は夢で決まっているという感じだと思いました。

初発感想4 (C組TY)

この三つの話の「夢」は，どれも自分にとって良い夢である。しかし，その「夢」について他人に話してしまうと，その通りにはならず失敗してしまう，ということになってしまう。だから，「夢」は誰にも話すべきではない，と書かれていた。私はこの三つの話を読んで思ったことは，「夢」は，必ず実現することを見ている訳ではない，と思った。

初発感想5 (C組HI)

楽しい夢を見たり，怖い夢を見たり，現実ではあり得ないような夢を見たりと，私なんかは特にたくさん夢を見る。でもいくら印象深い夢でも，夢は夢なのだから，すぐに忘れてしまうし，これが現実にどうなるというような期待はそれほどしない。現代の私たちはあまり夢を重視しないように思うが，平安時代の人々は違うようだ。何か夢に特別なことを期待しているようだ。

感想1，2，3，5のように，大部分の生徒が，「夢」は「未来を占うもの」「将来を示すもの」「人生を決定するもの」などと，テキストの表面上，「夢」に与えられた意味と，その重要性を理解している。また，感想3，4のように，説話毎の重なり合い方や構造の比較から「夢」の意味を捉えようとする者も，少数ながら見られた。

生徒全員分の初発の感想を確認し合った後で，次のようなまとめと学習のテーマを与えた。

①「夢」というものが，平安時代の人々にとってどのようなものであったと，私たちは読み取っているのか。

②そのような私たちの読み取りは，どのようにして生み出されたのか。

③「物語」の登場人物，語り手，読み手の立場から，それぞれ「夢」の意味を考えてみよう。

3．人物調査と，中間まとめ

三編の説話・エピソードの登場人物，伴大納言善男，藤原師輔，吉備真備について，それぞれどのような人物か（どのような出来事があったのか，当時の人々からどうように評価されていたのか）を，学校の図書館の本を使って調べる活動を行った。

一人の人物について生徒8人ずつ，授業時間の制約もあって，グループ学習の形態は取らずに，各人が担当した一人の人物について，B5版用紙1枚に人物調査レポートとしてまとめることにした。

それぞれ歴史事典や人名辞典から始めて，図書館の検

索機能を使用して，通史や講座の該当箇所を読んだり，伴善男については美術書のコーナーから『伴大納言絵詞』を，藤原師輔については『大鏡』を，吉備真備については岡山県の郷土史のコーナーから本を探し出したりなどした。活動時間としては授業時間３時間をあてたが，禁帯出の本を読むために昼休みや放課後を使ったり，調べた内容をＢ５版１枚にまとめるために，実際には課外の時間を多く要した。

生徒全員分の人物調査レポートをプリント（受講者が24 人なので，Ｂ４両面印刷６枚で全員分がカバーできる）にして配布し，互いに読み合って「夢」説話を読み解くヒントを各自でまとめる（中間まとめ）ことに２時間，さらに，その中間まとめを生徒全員分互いに読み合うことに１時間をかけた。

以下に生徒の中間まとめをいくつか紹介する。（中間まとめは箇条書きでも文章化でも可とした。原文のまま。ただし，傍線は金子による。）

中間まとめ１（Ｂ組ＫＨ）

○伴善男：心にゆとりがない／有能な政治家
　　→・流刑／評価の低下

○藤原師輔；おおらか／信仰心が強い
　　→・摂関政治の祖／摂関にはなれなかった。

○吉備真備：努力家／「怪しげな占いの類は信じてはならない
　　→・異例な出生を遂げた。

☆夢合わせに失敗してしまった伴善男，藤原師輔は，結果としてあまりよい人生ではなかったが，他人の夢を取った吉備真備は出世をし，比較的よい人生を送った。

中間まとめ２（Ｃ組ＴＹ）

三人の人物の人生は，「夢」説話にあるように，成功できなかった者，良い人生を送った者と分かりやすく分かれていたと思う。「夢を取る」と書かれた吉備真備の人生は良いと言えると思う。しかし，「良い夢を見たが，人に話した」と書かれた伴善男・藤原師輔は失敗もあり，良い人生とは言えないと思う。

「夢」は当時の人々にとって未来を表す重要なものであり，形はないけれど「取る」や，話すことによって「離れてゆく」ように思われていた。「夢」説話は，当時の人たちが，人生に「夢」が大きく影響する存在だという考えがあって書かれたのかな，と思う。でも，夢は必ずその通りになるわけではない。

中間まとめ３（Ｃ組ＴＡ）

○伴善男：失敗の人生
　　大納言の地位，応天門の変→没落，心の狭い人，前科有，周りからあまりよく思われていない。
（夢合わせが当たっても外れても人生は変わらなかった気がする。失敗したのは自業自得。）

○吉備真備：成功の人生
　　学者から右大臣，努力家，占いは信じない，敵も味方も多い。
（努力家で謙遜な人は夢を取るなんてしないと思う。努力して出世したのに盗人みたいに書くのは失礼では？）

○藤原師輔：私は成功だと思う人生
　　右大臣，人々からの評判は良し，子孫も栄える。
（夢の話はあとづけのような気がする。夢合わせを間違えただけで最悪の人生だなんてつまらない。夢合わせを外してその人の人生をくるわす女の人の力って，どんだけ絶大？）

中間まとめ４（Ｃ組ＳＲ）

伴善男は，自分が見た夢は「高貴な地位に昇る」という内容のものだった。そして実際，その通りになってはいるのだが，自らの企ての失敗により流刑となり，伴家は没落してしまっている。藤原師輔は，子孫も栄え，自ら思い通りにならないことはほとんど無かったようだが，一方で自分は摂関政治の基礎を築いたにすぎず，自分が摂政関白に就任できなかっただけでなく，孫が天皇に即位する姿さえも目にすることはできなかったのだから，不幸といっても過言ではない。一方，他人の夢を取った吉備真備は，一度は朝廷から追放されながらも，再び入京した後は異例の出世を遂げ，学者であるにも関わらず右大臣にまで昇りつめている。

これらのことから，夢は将来に起こる出来事を知らせる「占い」のようなものだったのではないかと思う。本当に夢の通りになるのなら，伴善男と藤原師輔は最後まで幸せであってもよいと思うし，吉備真備ではなく実際に夢を見た国司の子が出世してもよいと思うからだ。だから，夢は「占い」なのである。別の言い方をすると，将来のことがそのまま予測できることなどほぼ不可能に近いのだから，「夢」を後で自分の出来事と重ね合わせて，確かにその通りだったと言っているにすぎないのではないかと思った。

この段階では，多くの生徒が「まとめ１，２」のように，「よい夢を見たからよい人生になった」「夢合わせに失敗したから没落した」のように，「夢」＝原因，人生＝結果とする，初発の感想に近い読み取りをおこなっている。しかし，登場人物の人生を詳しく調べた後なので，「まとめ２」の最後にあるように，「必ずしも夢の通りではない」という疑問も生じており，このような，単純に割り切っては読めないというもどかしさが，読みが深まってゆく契機になるのであろう。視点を変えて，「夢」を「後付け」のものであると捉えたものは，「まとめ３，

４」の２名であったが，発表を聞いている生徒には，自分の読みの方向性を与える大きな手がかりとなったようである。

４．まとめレポートと，相互評価

今までの学習を元に，まとめレポートを作成した（授業時間数の関係で，課題として提出させた）。字数は800字程度で，論述内容にふさわしいタイトルを各自でつけることとした。

この段階でも，今までの初発感想や中間まとめと同様に，生徒全員のものを互いに読み合う活動を加えた。今回は「論文コンテスト」形式にして，「よい」と思う論述にコメントを加えて一票を入れるという形で，読みを深めることにした。

情報処理演習室で１時間かけてワープロに打ち，名前を伏せて生徒全員分のまとめレポートをプリントにして配布し，互いに読み合うことに２時間，さらに，各自が３編を選んで評価コメントを加える活動に１時間をかけた。

以下は生徒全員のタイトル一覧と，投票結果である。（投票結果の発表は上位６位まで。生徒 24 名に，金子と，授業観察をした国語科教育実習生５名を加えた，30票満票。ａ～ｗは生徒24名のエントリーコード）

ａ：「無理な」理解　＊第３位同点（９票）
ｂ：人生と夢
ｃ：夢よりも大切なこと
ｄ：「夢」が与える影響について
ｅ：時代の背景　＊第６位同点（７票）
ｆ：最終的に人生を決めるもの
ｇ：説話の中での「夢」とは何か？
ｈ：フィクションの物語と夢　＊第６位同点（７票）
ｉ：変わらない「人間」　＊第１位同点（14票）
ｊ：「結果」としてみる夢
ｋ：人間と「夢」
ｌ：夢説話の語り手
ｍ：「夢」介入による現在確立
ｎ：現実と虚構　＊第５位（８票）
ｏ：筆者が考える「夢」
ｐ：現代と昔との考え方の『ズレ』
ｑ：当時の人々の夢と私たちの夢
ｒ：今も昔も「人間」　＊第１位同点（14票）
ｓ：夢は，夢なんだよ。今も昔も
ｔ：「夢説話」について語り手の考えと読み手の考え
ｕ：夢と真実
ｖ：人生≠夢
ｗ：「夢」とは何なのか
ｘ：『嫉妬と願望』　＊第３位同点（９票）

投票結果の上位６位までのもの７編については，名前を明記し，投票者のコメントも加えて再度全員で読み合わせた。

以下に生徒の論述と，他の生徒から与えられたコメントをいくつか紹介する。（原文のまま。ただし，傍線は金子による。）

今も昔も「人間」（Ａ組ＨＳ　＊第１位同点）

伴善男，吉備真備，藤原師輔の夢説話を読んで，それぞれの「夢」は捉え方などによってはすべてがその通りとはいえない部分もあるが，すべて事実で出来事としては間違っていない。本当にそんなことがあるのかと思うほどの当たりようだ。こうして考えてみるとこの夢説話は実は彼らの人生が終わった後で作られたただの物語なのではないだろうかと思えてくる。こんな歴史の本に名前が出てくるような人たちが根拠も何もない夢占いを信じるとは思いにくいし，吉備真備にいたっては「占いの類は信じない」と紹介されている。だからこじつけのような形で彼らの人生の中に夢の話を組み込んだのではないだろうか。

では，なぜこの物語の作者たちはこのような話を作ったのだろうか。一言で言うと「おもしろい」からだと思う。彼らはそれぞれでまったく違う人生を歩んだが，平々凡々な人生を歩んだ人はいなかった。そんな彼らの人生にこの夢説話を加えることで，それはより不思議なものになる。つまり興味深い，おもしろいものになると思ったのだと思う。そしてこの話をあるいは彼らの人生そのものを伝説のようなものにしたかったのではないだろうか。

現在でも何かで成功した人たちが，夢占いではないけど，何か占いのようなものをすると，必ずといっていいほど「神様がそうしてくれた」などのそういった類の話を聞く。このような話は説話のようなものではないだろうか。そして私たちはそれをすべてではないにしろ信じてしまう。

こう考えてみると今も昔も変わらないような気がする。自分たちにとって雲の上にいるような人たちに，色々な物語をくっつけてそれを知ることで，その人たちのことをより知ったような気持ちになり，その人たちと近くなったような感覚を覚える。形ややり方は違っても今の人間も何百年前の人間も変わらないことはあるのだと思った。「現代の人間は……」と言われる今の世の中でこのようなことを発見できたのは，少し嬉しかったし，安心できた。私たちは何年たってもやっぱり同じ人間なのだということが時空を超えて感じられたような気がする。もちろん変わったところもあると思うけど，悪くな

ったところは昔の人から学び，よくなったところは昔の人たちに胸を張るような気持ちで生活していけばいいのだと思う。直接会うことなどもちろんできないけど，私たちは文字でつながることができるのだから人間の特権を最大限に生かしていこうと思った。

評今と昔の人間の思考は同じである，ということが分かった。自分の人生が悪かったら，「神様はひどい人生をくださった」などと文句を言う。そっくりすぎて頭が痛くなるようだ。だから，「現代の人々は……」とケチを付ける行為は，昔の人々にもケチを付けることになるのだ。タイトルにふさわしい文章だと思う。（A組MC）

評今も昔も同じ人間ということがよく分かった。私は今と昔の人間は違うとイメージ的に感じていたから，この人の考え方は私と反対でおもしろかった。説話は，暇な現実世界の事実に「夢」というおもしろさを付け加えたものだ，ということが分かった。文章を読んで感じたことや読み取れることを上手にまとめていて，とても読みやすい文章だった。（C組ON）

評今も昔も夢に対する人間の考えは同じだ，という意見で，吉備真備は「占いの類は信じない」という事実も含めて書いているから説得力がある。どうして「夢」説話にしたのかについては，当時の人々が「おもしろさ」を求めたため，とまとめてあり，そこでも今も昔も変わらないのだなぁ，と改めて感じさせられた。（C組HI）

評「夢」は，三人の主人公の人生に対する後付の物語である，という問題提起をした上で，その理由付けを行い，さらにそこから現代の人々と当時の人々との共通点を導き出しているという文章の構成が，とても上手いと思いました。普通の人とは違った人生を歩んだ三人の主人公について，そのエピソードを伝説のようなものとして残したかったのではないか，という見方は，当時の人々にとって単なる「物語」だけではなく「教訓」としての文学でもあった「説話」の性質を考える上でも有効だと思います。（教生）

『無理な理解』（A組IS　第3位同点）

はじめ，私は，「平安時代の人々は『夢は未来の予兆だ』と信じていた」と思っていました。しかし，今回の授業を通して，三人の人生を見た周りの人々が，夢と結びつけて文章化しただけなのではないか，と考えるようになりました。たとえば，伴善男と藤原師輔の場合は，「あんなに出世していたのにうまくいかなかったのは，悪い夢を見てしまったからではないか」と考え，吉備真備の場合は「はじめは位は低かったのにあれだけ出世したのは，よい夢を見たからに違いない」と考えたのではないでしょうか。このように，一方的なものの見方でその人を評価しようとする考えは，現代でも多く見られます。たとえば，偉業を成しとげた人がいた場合，その人のすごさを強調するような「エピソード」が多く伝えられます。その「エピソード」の中には，事実でないことや誇張されたことも少なくないのですが，それを聞いた私たちは，「なるほど，そんなことをした人だからあんなすごいことができたんだ」と一方的に考えて納得してしまいます。

どうしてこのようなことが起こるのでしょう？　それは，その人がなぜそのような生き方をしたのか周りの人はわからないのに，無理に理解しようとしているからだと思います。その「無理な理解」の手段として，昔の人々は，正体がよく知られていない『夢』を用いたのでしょう。

現代の私たちは，『夢』の正体を知っているので，「無理な理解」にそれを用いようとは考えません。その代わりに，報道される「エピソード」をうのみにして，理解しようとします。しかしその方法は，場合によっては人を傷つけたりしてしまうことになりかねません。たとえば，悪事を犯した人を報道する場合，その人の卑劣さを強調するような「エピソード」が多く語られます。その中には，偉業を成しとげた人の報道と同じく，事実でないことも多くあるでしょう。そうなると，その人は「昔から悪い人だったんだ」というレッテルを貼られ，更生などに影響がでるかもしれません。

このように，いつの時代の人々も，他人の生き方を理解しようとしていますが，なかなかうまくはいかないようです。昔の人も現代人も，共通点は多くあると思います。

評具体例（エピソード）を挙げて説明しているので理解しやすい。「社会の中で生きていくのに必要な『他者理解』は，どうしても個人・マスコミなどのフィルターを通して見てしまうので，その人の真実を知るのはなかなか難しい。それは今も昔も変わらない…」このまとめを読んで，私たちがふだん何気なくしている「他者理解」というのは「自分を納得」させるだけのもので，この考えはずっと変わっていないのかな，と思った。（C組TA）

評平安時代と現代の人間の共通点を，「他者理解」の面から上手に見出し，まとめていた。理解に無理が生じた結果，一方的な見方と思いこみによって自分の中で虚像を作り上げてしまう，という考えは，「夢」が事実に付け加えられた理由を説明するのにぴったりで，納得できた。（C組SR）

現実と虚構（A組TA　第5位同点）

「夢」説話の語り手は，それぞれの主人公の人生を「夢」という作り話で表そうとしたのだろう。そもそも夢は生

きている中で何度も見るものだ。その中の一つを取り上げて未来を占うことなど不可能だ。だから，この説話に出てくる「夢」は虚構，つまり語り手の作り話と考えられる。では，なぜわざわざ作り話をしたのだろうか。その答えは三人の主人公の思いがけない人生にある。伴善男，藤原師輔は家柄がよくても，満足な人生が送れなかった。しかし，学者であった吉備真備は右大臣になるという異例の出世を遂げ満足な人生であった。このように，主人公たちは生まれの家柄では考えられないような思いがけない人生を送っている。しかし，彼らの没落，栄光の明確な理由は明らかでない。たとえば，伴善男の放火事件では，本当に彼は犯人だったのか，藤原師輔はなぜ死んだのか，学者の吉備真備がなぜ右大臣まで昇進したのか，語り手はそれらを疑問に思い，彼らの人生を説明する材料が足りないと感じたために「夢」を用いて作り話をしたのだ。

ところで，この話は虚構と現実が交ざった話だ。主人公の人生が現実で「夢」が虚構だ。私は今まで現実か虚構という両極端の文章しか読んだことがなかった。だからこの説話を読んだとき書いてあることすべてを現実だと思い込んでしまった。しかし，読み進めるうちに現実と虚構が入り交じっている事に気づいた。この説話から，現実を説明するために筆者の都合で虚構が作り出され，その二つの区別をつけながら読むことが読解の鍵であり深く読むことができるのだということが読み取れた。

評文章がきちんと順序立てられていて，読みやすかった。一つ述べた意見には，ちゃんと理由が述べられていて納得しやすかった。また，この人の夢説話の捉え方によって「夢説話がこうやって構成されているんだ」ということがよく分かったと思う。「これは本当にあったのか」それとも「ウソの話なのか」という二者択一で捉えるのではなく，本当とウソが半分半分と考えることによって夢説話が成り立っているのだ，と思うようになった。このような柔らかい発想がとてもいいと思った。（A組ＨＳ）

評説話の語り手の疑問点を見つけ出し，自分なりの解釈を付け加えていた。三人の人物の生涯を簡潔に述べて，そこから生まれる疑問点を，一人一人について見つけ出している。このようなことから「夢」説話は「虚構と現実」が混じり合った話だ，と結論を導き出して，またその結論から気付いた「鍵」から物語を深く読み取れる，というようにさらに論を発展させているところがよかった。（B組ＫＨ）

生徒作品の引用が長くなったが，生徒による得票結果の適切さと，これも生徒による評語の的確さが，授業での読み，リテラシーの深まりを示していると考える。

上記３編に限らず多くの論述が，テキストの表面上の「夢」の意味づけを，「語り手」や「虚構」という概念を用いて相対化し，さらに現代社会に生きる自分自身との関係から古典を読む価値を見出そうとしたり，自分自身のものの見方を問い直そうとしている。特に，得票が集中した上位６編はそのような特徴がよく表れた論述であり，支持が集まったのは，生徒たちがそのような過程そのものを意識できたからであろう。私たち自身の読みを作り出してゆく過程を意識するという，リテラシーを育成する上で必要な経験を，古典の学習を通して積み重ねることができた。

５．おわりに

本単元においては，通常の授業で教師が行う「発問」や「板書」はほとんど行わなかった。生徒全員の意見・感想・論述をまとめ，生徒が互いに読み合う際に適宜指名をしたり，補足説明を求めたりという交通整理に徹しただけである。選択授業で受講者が 24 名と少人数であったため，意見交換もしやすいという利点もあったが，学習を終えての感想には，次のような意見が多く見られた。

感想１（A組ＨＳ）

この「夢」説話をずっと読んできて，私は授業がすごくおもしろかった。一つの話をこんなに深めていったのは初めてだった。何回もみんなの意見を読み合わせたり，クラスの意見だけでなくいろいろな本も参考にしたりして，たくさんの考え方を知ることができた。そのいろんな人の考えを拝借しながら，自分の考え方やものの見方も広がったように思う。

感想２（C組ＳＲ）

（途中略）けれども多面的に見る，というのはなかなか難しい。視点を変えるというのは，いったん自分の考えを改める，もっと言えば，自分の考えを否定するということにもつながるからだ。今回は，一つの文章だけを読むのではなく，資料を探したり，たくさんの友だちの意見を何度も読み重ねることで，自分をなくすのではなく，自分のからを破ることができた。

本単元の実践を通して，リテラシーを育てる「場」としての，「集団」「他者」の存在の意味を改めて確認できたように思う。またそれは，（他教科のことは知らず）国語科の授業でリテラシーを高める取り組みをする際に，数値化・数量評価することの難しさ，あるいは実りの無さと，表裏の関係でもあるように思われる。